

岐阜県学生献血ボランティアの取り組み I

市橋 美穂¹・望月 武¹・松本 真起¹・太田 朋華¹・後藤 将¹・堀江 有加里¹
木村 孝子¹・平光 美津子¹・山本 初津恵¹・多和田 嘉明¹・篠田 貢一¹
杉下 毅¹・佐藤 恵彦¹・青木 明日香²・林 小夏²
野村 雅之³・太田 貴文³・デュアー 貴子¹

(1 : 東海学院大学, 2 : 岐阜県薬務水道課, 3 : 岐阜県赤十字血液センター献血推進課)

要 約

安定的に血液製剤を供給するには、その原料となる献血血液を継続的・安定的に確保する必要がある。しかし全国的に若年層の献血者数が著しく減少しており、令和3年度厚生労働省による「献血推進2025」では若年層に対する献血推進活動が強化されている。岐阜県でも「未来へつなぐ献血プロジェクトぎふ」を開始し、若年層への啓発強化の一環として大学生を中心とした学生ボランティアの活動により若年層の初回献血者獲得を図っている。

本学科では岐阜県学生献血ボランティアに学生が登録し、岐阜県薬務水道課及び岐阜県赤十字血液センターと連携して街頭啓発活動などのボランティア活動を行った。同時に本学科が保有するキッチンカーにて学生は「献血カフェ」も開催し、教員は献血者を対象に栄養相談や検査値の見方などを説明した。また貧血予防食材の紹介や授業内で考案した献立などをInstagramに投稿した。学生はこれらの活動を通じて献血の重要性を認識し、若年層の献血者確保に協力するだけでなく、健康課題である貧血等に対する食育活動に取り組みながら様々な人と関わることで社会的スキルを身に付ける良い機会となったと推察する。

キーワード：献血、岐阜県学生献血ボランティア、未来へつなぐ献血プロジェクトぎふ

1. 血液事業の現況

令和3年度血液事業報告によると、献血とは「自発的な無償供血」のことであり、病気の治療や手術などで輸血や血漿分画製剤を必要としている患者さんのために、健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティアである。血液は現代の科学技術をもってしても未だ人工的に製造することができず、かつ血液製剤には有効期限があるため、血液製剤を供給するためには常に新しい血液を確保する必要があると示されている¹⁾。

血液製剤を安定的に供給していくためには、その原料である献血血液を将来にわたり安定的に確保する必要があるとされている²⁾。そのために厚生労働省では毎年献血推進計画を定めているほか、将来の需要予測などを踏まえた献血推進に係る中期目標を設定している。今般、令和2年度で「献血推進2020」³⁾の目標期間が終了し、令和3年度から令和7年度までの5年間を目標期間とする新たな中期目標「献血推進2025」⁴⁾が令和3年1月に開催された献血推進調査会にて設定された。「献血推進2025」に示された日本赤十字社のシミュレーションによれば、年齢別血液製剤の使用量の推移から将来推計人口

を用いて算出された令和7年度の必要献血者数は477万人～505万人であり、最大65万人の献血者が不足するという結果である。血液製剤の需要についてはほぼ横ばいであるのに対し、血漿分画製剤の中の特に免疫グロブリン製剤の需要は増加傾向にあることを踏まえた場合、必要献血者数は485万人～509万人であるとしている²⁾。

令和3年度血液事業報告によると令和2年度の全国の献血者数は約504万人(延べ数)であった²⁾。平成29年度以降の献血量と献血者数は増加している傾向にあるが、問題は若年層の献血者数である。図1は年代別献血者数と献血量の推移を表したグラフである。令和2年度と10年前に当たる平成23年度の献血者数を若年層に着目して比較すると、平成23年度の各年代の献血者数は16～19歳で29万人、20～29歳で102万人、30～39歳で130万人、合計261万人である。対して令和2年度の各年代の献血者数は16～19歳で20万人、20～29歳で71万人、30～39歳で83万人、合計174万人であった。16～39歳の献血者数は10年間で261万人から174万人と約33%減少していることになる。また全献血者数に対して16～39歳が占める割合で見ても、平成23年度

岐阜県学生献血ボランティアの取り組み I

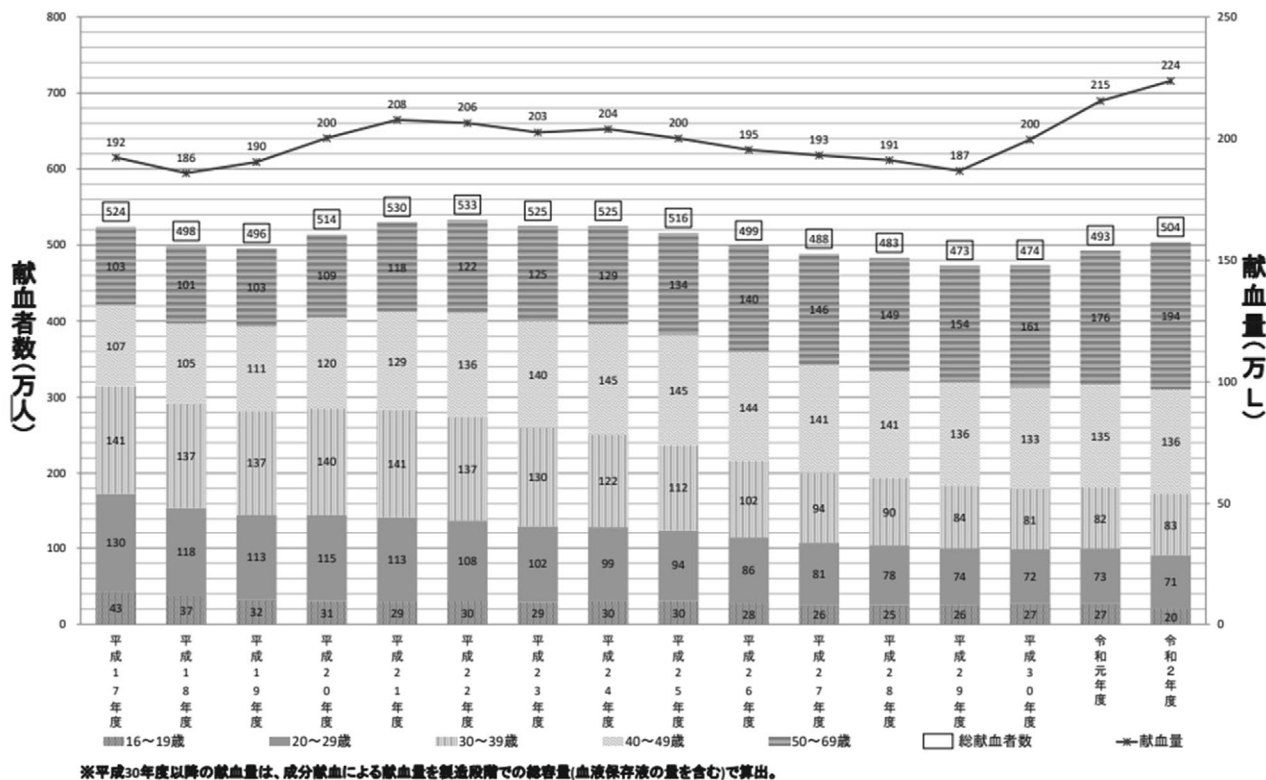


図1 年代別献血者数と献血量の推移 出典：令和3年度血液事業報告より

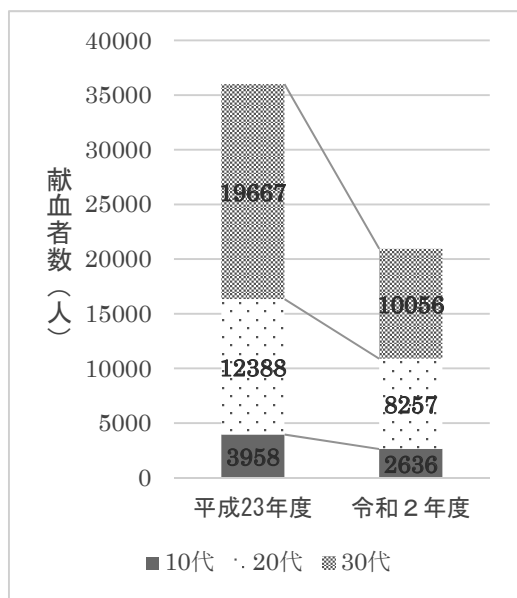


図2 岐阜県の若年層献血者の推移 (岐阜県献血推進計画より改変)

は全献血者数 525 万人に対して 261 万人と 49.7%であり、令和 2 年度は全献血者数 504 万人に対して 174 万人と 34.5%である。全献血者数に対して 16～39 歳が占める割合では、10 年間で 15.2%減少したことになる。少子化で献血可能人口が減少している中、将来にわたり安定的に血液を確保するためには、若年層に対する献血

推進活動がこれまで以上に重要とされており、「献血推進 2025」においても重点的な取り組みとして若年層への対策強化を掲げている^{2) 4)}。

岐阜県においての令和 2 年度の献血者数は 68,740 人(延べ数)であったが、若年層の献血者数は年々減少している。10 年前に当たる平成 23 年度と比較して、10 代では 3,958 人から 2,636 人と約 33%の減少、20 代では 12,388 人から 8,257 人と約 33%の減少、30 代では 19,667 人から 10,056 人と約 49%減少していることから、やはり若年層の献血者数の減少が問題となっている(図 2)。将来にわたり安定的に血液製剤を確保できるよう、県・市町村・血液センター及び関係機関が連携して、若年層の献血推進に取り組む必要がある⁴⁾。

令和 4 年 7 月より岐阜県は「未来へつなぐ献血プロジェクトぎふ」(以後、献血プロジェクト)により若年層を対象とした普及啓発の強化を開始した⁵⁾。献血プロジェクトの事業内容は、①10 代及び 20 代前半の初回献血者の増加(トライアル獲得)、②獲得した献血者について 2 回目以降の再来促進(困り込み)、③20 代・30 代献血経験者の再来促進(リピート促進)の 3 つの柱を目的として活動している⁴⁾。

岐阜県の献血ボランティアは献血プロジェクト以前より行われていたが、新たな取り組みとして大学や専門

学校生による学生ボランティアを登録制度とし、学生ボランティアと岐阜県及び岐阜赤十字血液センターの連携により若年層の初回献血者獲得を図っている。具体的な施策として①大学等に対する学生献血ボランティア活動の周知、②学生献血ボランティアを活用した啓発活動体制の整備、③大学と連携した学内献血の促進である。学生ボランティアの活動内容は、献血会場での呼びかけを行う街頭啓発活動や学内献血イベントへの協力、自身のSNSでの献血に関する情報発信、Instagramにおける岐阜県公式アカウント「gifu_mirai_kenketu」に投稿する原稿の作成、学生献血ボランティア集会への参加などである。岐阜県の学生献血ボランティアは令和4年7月時点で大学生273人、高校生27人が登録している⁶⁾。

岐阜県の協力の下、8月12日(金)と10月28日(金)に本学科の学生がボランティアとして献血啓発活動に参加し、さらに本学科の保有するキッチンカー「管理栄養学科 Kitchen」にて「献血カフェ」を開催したので、本稿ではその活動内容と今後の展望について報告する。

2. 本学科での活動内容

1) 学生ボランティアによる街頭啓発活動

献血プロジェクトの一環として、今回初めて献血バスの配車を乗降者の多いJR岐阜駅で行い、主に10代から30代の若年層に対して協力を求めた。学生ボランティアはJR岐阜駅周辺にて献血の協力を求める呼びかけを行い、また同日開催された学生献血ボランティア集会において今後の啓発活動について意見交換や企画の考案などを行った(図3)。



図3 街頭呼びかけの様子

2) 岐阜県公式 SNS への投稿

学生ボランティアは岐阜県公式 Instagram に投稿する原稿の作成にも励んでおり、10月11日時点で31件



図4 Instagramに投稿された貧血予防食材の紹介

の投稿が完了している。投稿内容は大学の授業内で使用した貧血予防食材とそれを使用したレシピの紹介、人体や血液学、輸血に関する実習授業の内容、またそれらをメインテーマとしたオープンキャンパスなどのイベントの紹介などである(図4)。

貧血予防といえば一般的に知られている栄養素は鉄であるが、学生たちは自らの専門性を生かし、鉄以外の造血にかかわる栄養素の説明やそれらを多く含む食材の紹介、より体に取り入れやすくするための効率の良い食べ方などを紹介していた。

また、貧血や「やせ」を理由に献血に協力できなかった学生たちが自分たちに何かできることはないかと考えたことをきっかけに、若い世代の健康的課題の解決の一助となれるような献立の立案を行い、これらを Instagram に投稿した。特に若い世代に多い課題である栄養バランスや欠食の改善⁷⁾に着目し、さらに第4次食育推進基本計画に掲げられている課題である郷土料理の継承⁸⁾などの項目も意識し考案されたレシピは、本学科3年生の実習科目「給食経営管理実習」の授業内で実際に調理・提供された(図5)。



図5 Instagramに投稿された学生起案の献立

3) 「献血カフェ」の開催

本学科の保有するキッチンカーにて、献血協力者へドリンクやお菓子を提供する「献血カフェ」を両日ともに開催した。お菓子は貧血を予防できるような鉄分を豊富に含むレーズンやプルーンを使用したチョコブラウニーを開発し提供した(図6)。学生たちは献血を終えた方に労いの言葉をかけながらお菓子などを提供し、市民の方々と会話を楽しむ様子も見られた。また本学科から管理栄養士の資格を持った教員と臨床検査技師の資格を持った教員が、隣接された栄養相談コーナーで栄養相談や血液検査の結果の見方などを説明した(図7)。これらの様子は岐阜県薬務水道課のホームページにて本学科での取り組みとともに紹介された。



図6 提供されたチョコブラウニー



図7 献血カフェと栄養相談コーナーの様子

3. おわりに

今後の展望として今年度は令和5年1月7日(土)、1月21日(土)にJR岐阜駅での献血バス配車が予定されており、併せて学生ボランティアによる街頭啓発活動及び献血カフェを実施する予定である。引き続き学生からボランティアを募り、学科全体で若年層における献血者の増加に貢献できるよう努めていきたい。

また今回のボランティア活動を通じて、学生たちは献

血の重要性を改めて学ぶことができ、また他学年の学生や市民の方々など、普段大学内では関われない人たちともコミュニケーションを取る良い機会となったと推察する。若年層の献血問題はもちろん、食育活動として、そして学生の社会的スキルを身に付ける良い機会としても、今後より多くの学生に継続的に参加してほしいと願う。

謝辞

「献血カフェ」開催にあたりご支援ご協力を賜りました岐阜県健康福祉部薬務水道課様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省 令和3年度血液事業報告 第1章
<https://www.mhlw.go.jp/content/11120000/000910271.pdf> (最終閲覧日 2022/11/01)
- 2) 厚生労働省 令和3年度血液事業報告 第2章
<https://www.mhlw.go.jp/content/11120000/000910272.pdf> (最終閲覧日 2022/11/01)
- 3) 厚生労働省 献血推進に係る新たな中期目標「献血推進2020」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000070049.html> (最終閲覧日 2022/11/01)
- 4) 厚生労働省 献血推進に係る新たな中期目標「献血推進2025」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11127000/000798547.pdf> (最終閲覧日 2022/11/01)
- 5) 令和4年度 岐阜県献血推進計画 別紙「未来へつなぐ献血プロジェクトぎふ」より
<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/287665.pdf> (最終閲覧日 2022/11/01)
- 6) 令和4年8月8日 岐阜県公式発表報道資料より
<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/312038.pdf> (最終閲覧日 2022/11/01)
- 7) 農林水産省「考える やってみる みんなで広げる ちょうどよいバランスの食生活」
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/wakaisedai/balance.html> (最終閲覧日 2022/11/01)
- 8) 農林水産省 第4次食育推進基本計画 令和3年3月9頁～15頁
<https://www.mhlw.go.jp/content/000770380.pdf> (最終閲覧日 2022/11/01)

市橋 美穂・望月 武・松本 真起・太田 朋華・後藤 将・堀江 有加里・木村 孝子・平光 美津子
山本 初津恵・多和田 嘉明・篠田 貢一・杉下 毅・佐藤 恵彦・青木 明日香
林 小夏・野村 雅之・太田 貴文・デュアー 貴子

Blood Donation by University
Student Volunteers in Gifu
Prefecture I

ICHIHASHI Miho,
MOCHIZUKI Takeru,
MATSUMOTO Maki,
OTA Tomoka, GOTO Sho,
HORIE Yukari, KIMURA Takako,
HIRAMITSU Mitsuko,
YAMAMOTO Hatsue,
TAWADA Yoshiaki, SHINODA Koichi,
SUGISHITA Takeshi, SATO Shigehiko,
AOKI Asuka, HAYASHI Konatsu,
NOMURA Masayuki,
OTA Takafumi and DEWAR Takako